伊勢物語傍註　上（安永五年版）

椙山女学園大学デジタルライブラリー

椙山女学園大学図書館

伊勢物語傍注

上

天自 六 五十一号

92B 915

古乃言ハ正し言正しき加ゝ尓かんなを
正し姆るきみとを尺てお乃ち加ゝい
ちたるし世物語を誰ゝ似るるやを人と
きゝてもしらねといと古記物よ世を世
多ちてをとかんなを正しかゝぬまにこき
な勢るゝみ世よ松ほうをさを世を改
きをさんを志ゐる人もきかすなんあをきる
尓ゝ尺ゝ尓季を麿ぬし法ゝ加ゝかうゝて一の屋
ゝ尺ゝを正しとゝ多古乃かんなよこき改
て木よ恵ゝ勢ゝ海ゝ尓ゝ尺ゝを多ゝ毛ゝ乃ハ

[illegible]

いかゝ[illegible]

かさ[illegible]

さしは[illegible]

岡田御風

伊勢物語傍注

一　世ゝ伊勢物語の素本やとおもふるなり[illegible]

[illegible]

一　[illegible]

侍従或首書とくとく註解を法ねよ和
ばかりてきるなり

一　本文の哉同と真字伊勢あ張甚外哉本
と考あくとて去る事但なき哉同仮さい
ひのやまりとおもひたくはつきてきるなり

一　侍従業平書と古人の考かるべ其まく母
あ意又なるくのそるよ考ふる不とも聊
考新仮きとなきの考と事をいと不
せられてはつきてきるさ次

一　のなきをあ仮の時代よきるとなるなを

きていすれ此の仮字法ひすてうき侍りぬ
万人とうむ次

安永五年十一月　賀茂季鷹

千載集羇旅
をそろの國より
きてしらせたる

源氏の君
ゆちの公紙に
ひつさうぞくひ
てゝ

故郷

○むかしをとこ初冠ういかうちして奈良の京春日の里に
知由 狩 往
しるよしてかりにいにけり。その里にいとなまめいたる
姉妹
ある女はらからすみけり。をとこかいまみてけり。ほのか
なるまゆみ。いとなつかしくしたるけはひなりけり。
男のきてゝりける衣のすそをきりてかりにやるとて
やるその男。春日野の若紫のすりのかりぎぬ
春日野はよろしきのとりてもち
ちぢのみだれかぎりしらるまでに
續
しのぶのみだれかぎりしらるまでに
いやとをくいでおりしき者

延暦一年遷都于長岡同十三年遷今京

和名抄鹿尾菜 比須木毛

五條太后順子 關院太政大臣冬嗣公女仁明帝后文德帝母 二条后嬉

ゝもやおりい給ん

みちのくに思ひたちてゆく人あり

京にまかりて見ん我をしらんとて

やをいみしのこゝろざしをこなう。昔人らかくいらしやうに

（戾・摺）（意）（最早）（都・樣）

みやびとうしんの体なり

○昔ゝとこゝにさうぶの京をはなれ。東京に人の家まづ

ちかくまづ女ありけり。西の京に女ありけり。その女せめていと

まことにこゝろ。男人こゝろをかけ心をうごかしたりけり。男のこと

もをこゝろざしをかけて彼まめ男。うらみてゆかずきて。いづちにかゆくらんとおもふ。あるたまをやりける

（忠誠）（懸想）（本意）

おきもせず寝もせでよるを明かしては

春の日のくらすけさのこゝろかな

○昔男ありけり。けさうしける女に年ごろいとまめにて

やりてけり

かりにあるべきものとは思へども

いとよりのちは神とこそ思へ

二条の后のまだ帝にもまつりたまはぬ。あ人

おこゝろにかけ給ひけるとき。

○むかし東の方に人のよばひにまかりける。西の野に

住人ありけりとほいもとにて。心ざしあるをとこ

行くとていとるとて。心月の十日ごろの夜ふかくなれば。
あるべきことなりけり。人乃いきあるべきよりもいとかなしく
なほうしろいつるんあるる。又年の心月より梅の花盛
よりこそとて。いきて。さて人々てこれどもいとかなしく
くもあり。千。ちはやぶるかみよ月のこめまで
臥
姫きりて。去年とおりいでてよめる

月やあらぬ春や昔の春ならぬ
わが身ひとつはもとの身にして

とよみて。夜のほのぼのとあけるまでなりまさる
○むかしとあるべき男ありけり。東の五条にわりなくものいきけり。

和名抄築墻都以加岐 豆以比知

和名抄亭閣波良

密
みそかなる所なりけり。門よりもえいでず。ねずみの穴あけたりけ
るをいでにけり。あるじきくとて。人をおこせけれども。ただ
くるまにのりてゆきにけり。あるじきくとて。そこなる人を
とらへてなぜとかとせめけれども。ただ知らぬ
人をとらへて。我がのいとのせきりてはは
よいてこそよりこしかをんな
とよみけるをきいてなんなりける。男。
二条の后のもとにまいりけるを。せうとたちとりこめてせけれども
兄
せうとたちとりこめてせけれども。
○昔男ありけり。女乃えうまでかけるを。年とへてよばひけり
得
結婚

二条后の兄昭宣公と夫納言国経卿也

古事拾遺事之甚切曰阿那

からうじてぬすみ出ていとくらきにきけり。あくたがはといふ河を
ゐていきければ草のうへにおきたりける露をかれはなにぞとなん
男にとひける。ゆくさきおほく夜もふけにければおにある
ところともしらで。神さへいといみじうなり。雨もいたうふり
ければあばらなるくらに女をばおくにおしいれて男ゆみ
やなぐひをおひて戸ぐちにをり。はや夜もあけなんとおもひつゝ
ゐたりけるに。鬼はやひとくちにくひてけり。あなやといひけ
れど神なるさはぎにえきかざりけり。やうやう夜もあけゆくに
見ればゐてこし女もなし。足ずりをしてなけどもかひなし
しらたまかなにぞと人のとひしとき

つゆとこたへてきえなましものを
是は二条の后のいとこの女御の御もとにつかうまつるやう
にてゐ給へりけるを。かたちのいとめでたくおはしければぬすみて
おひて出たりけるを。御せうと堀川のおとゞ。太郎国経
の大納言まだ下らふにて内へまゐり給ふに。いみじうなく人
あるをきゝつけて。とゞめてとりかへし給うてけり。それをかく
おにとはいふなりけり。まだいとわかうて后のたゞにおはしける
ときとや
○むかし男ありけり。京にありわびてあづまにいきけるに
伊勢をはりのあはひの海づらを行に。浪のいとしろく

をりてとそえて

いとゞしく過ぎゆく方に思ほゆる

うき世にさらぬ別れもなかりせば

やまとのかたへとる

○昔とこそ有るに。あやうくうたてあづまのくに

にきて住ごろもとして。女とる人いとうかりて

行くに。きぬぬのかりのこゝろを烟のこゝろと

仮法なるあさるめでたくよめりけるこゝろ

彼此

をとこ人のえうもなくなげかせ

○むかし男ありけり。世のなかをえ無益なりとおもひ

なりて。京をはあづまの方よりもとめくだりて

行くに。もとより友とする人にしるしてゆく。

みちをしる人もなくて。まどひいきけり。三河の国八橋と

いふところにいたりぬ。そこを八ちといふは。水くもの

のごとくなれば。橋をやつしたりけるなり。その国の人

いふる。芸州の宮島のごとし。木乃伎よりかたへいりたる

なり。その沢に杜若いとおもしろく咲たりけるを。

ある人のいふ。きつにのりてこゝろをもとゝして

旅のこゝろをよめといへれば。詠ず

かゝるときつゝなれにしまこそとおもへば

るばるきぬる旅をしぞおもふ

とよめりければ。みな人かれいひのうへに涙おとしてほとびに
けり。ゆき〳〵て。するがの国にいたりぬ。うつの山にいたりて。
我いらんとする道はいとくらうほそきに。つたかえでは
しげり。物心ぼそく。すゞろなるめを見る事と思ふに。修
行者あひたり。かゝる道はいかでかいまするといふをみれば
みし人なりけり。京に其人の御もとにとてふみかきてつく

するがなるうつの山べのうつゝにも
夢にも人にあはぬなりけり

ふじの山をみれば。さ月のつごもりに雪いとしろうふれり

時しらぬ山はふじのねいつとてか
かのこまだらに雪のふるらん

其山はこゝにたとへば。比叡の山をはたちばかりかさね
あげたらんほどして。なりはしほじりのやうになんありける。
なほゆき〳〵て。武蔵の国と下つふさの国との中に。
いとおほきなる河あり。それを隅田河といふ。其河の
ほとりにむれゐておもひやれば。かぎりなくとほくもきに
けるかなとわびあへるに。わたしもり。はや舟にのれ。日もくれ
ぬといふに。のりてわたらんとするに。皆人ものわびしくて京
に思ふ人なきにしもあらず。さるおりしも白き鳥の

子舉雪譽之註舉皆也

そこにあるいとあるき時乃かきつるぬ水乃とよあて
じついとそこぬよりそんそこるるんで皆人んそこど
そこーちよういそんぬそるん物をいとと云て
行すーおそでいざこそこそんあたる
そどそこる人をあるやるーやや
とあるそんぬ舟こどりてるきこそこと
○昔男むちこの方ぬでまどいあるきそこざてその國あるを女と
まどいそこ又そこ人よあそんていいるとまちんあて
なる人よ心はそこそけぬちそるん人すそこそんあそこ
あるぬちてるんあてる人をそいそこびむこどもよ

おこそこそこるぬどむ水るん入るの駅みすー世の里そこる
みすー世乃あの世ぬ居をむこそる
そこどかそこまどよそる
むこどもこう和
我こそりよそこそ和こ者世
このむ乃そこいそこそれ
そるん人のそこても和そる中るんぬ方ぬこそる
○むーそそこぬどる人むそこ女どちどもよ居りいおを
そこるるよ和を雲井よるりをそこも
そこり月乃かどりあ方ぬで

○昔男ありけり。人のむすめとなりけるとき、武蔵野へなりける。
ぬすびとありけり。武蔵野へ（将）
ぬすびとの国の守（守）にしてありけるあるじ、女をもとめ
て中よりおきてよりけり。（道）
ありけるあるじ、ぬすびとをなんとあるじ
そこへつかはしけるとぞ。
むかし男ありけり。莫燒
つまもこもまろ
やきそ若草乃
やまとにはあれども
○昔むかしある男、京にすまでよきことのみ
きこえ○ありけるを、やうきてぞよむかしあづまの
ちかくて後ぞかとにはよりしぬ。京より女

むかしあづまさほうがよりたのむとて
そこなるもつとしてそこらに
とあるとこそ堪難
とあるとこそ
こそでいとこそ○でこそむ武蔵野ぶん
こそこそこそ人こそこそこん
○むかし男、みちの国にすまでよりいりけるに、そこなる女。
京の人をめづらかやかがえんぜちよりそこなる男をんきこそ。
けてこそこそこん
中こそよこそよこそこそこそこそ
こそこそこそこそこそこそこそ
こそこそこそこそこそこそこそ

歌ゝ(鄙様)でいなかびたるぞよかりける。ぞよ歌ゝやうにいへり。

行ゝて見ぬ人の恋しさ

夜もあけばきつゝ(狐)なれにしまさりけり

まぐきよりけてせるとやうる

やうるとをこのくるんほるこて

くりもしらあもしらの人なるこて

こやこのつゝよいぐ(率)といくまーと

といくりられぐ(拉)ちほしてをいをしこぐいこりる

○山ーこちのくまてをぐ(伝云)ふこうきくの(妻)あよあいる

あやしーさやうまてあるべき女もあるべきみえんで

思ふ山ちのびてうよこちもぐる

人のうちのおくを見るべく

かりぎりのーいでーてちこどぐるまうまえびと心と

こてをぐいこをぐ

○むーー紀のあり常とて人方ぐ。みよ(仁明文徳清和)帝よりぐまま

つてすあいられぐ。後を世をうけうるよ。

世のをくあ人のごと(如)をのーぐ人ぐーいこりのーく。

あてくる(貴)常とこのーてこ(異)ぐ人もにぐ。ぐつーーく(経)て

を。形ぐーーくーーけちぐのぐ。よりつ紙乃常もこ。

年ぐちあいられぐ。やうこ(妻)こくるんて(床離)ぐーくるあまよ

古事記上須勢理毘賣歌
奴婆多麻能久路岐美祁斯遠

年だにもとてよろこべよろこび
いくとせとたのしきぞなん
うぐいすのこゑのうたにて
もゝやこの天乃もとにもむすびてを
長歌 日本紀 御衣乃 諸
あらぐるくるとたてまつるれ
不堪
よろこびよろこべで又
秋やくる雁やなくらん夏ぐさ
あるとなるぐれ後まぞなる
○年ごろかよひもしざりる人の桜のもとよりよろこびきたり
ふるあるべ

ありてぞのちもまでらてなりたる所へ
むかしはよとてなりたれぞとこもとといとあやし
かりしいとこぞ
とびてゆくあいてあいてるあるとこのりて。
如斯
かくしかくしてあるとこ何事をいかるこゝを
えをぞのこしたるこゝを出てかくよ
ほとゝぎすあいてあるこゝぞ
十
ほとゝぎすいつよりはなくよ
この友だちをそこそこかしいてあるべあまで
かくりあるよ先ぬ

あぐらうしとおもひてはなれぬる
年よりぬるをとこ
うぶし
をとこうしとおもひてはなれぬる
きえぬべしあるときは花とこそ
○若くのまごころある女あるとき男ちうあるをとこ女の
よしあるをとこ心をとこ菊の花のうつろひとを
とりてとてのもとへやる
ふるあるよ白きをいづれ何とか
枝をとりて挑ひ少しもこの花

をとこ
ふるあるよほのぼのとあけぬ
とりてをとこ
○むかし男あづまへくだりける女のこころぐるしかりける人となん
ちりぬるかな。花もちりぬべしとてとりてとりてにぎりしめて
めをとこのもとへ男はあるものをもとめていき
らんで女
ちはやぶる天
ちはやぶるかみよもきかじ
ちはやぶるかみよもきかじ
とてなんなんで男うせぬ

あまぎものようにして　ぬるとも
とぐる山の風もこうり
やまとうたにも　人こうんいる
○むかし男　東へあり　世をそむいて　ものしけるに
ひさしくして　京へのぼりて　すむべきつくりして
やすいどころ　えさだめてとて　かりにきて
あるじ　女のもとに　やどりをして　いやな
あるじ　秋の紅葉　ちりまがひ
さてやたちぬべき　京へ　いかがすべきと　いひやる

賢善也

きみがすむ
いづのるようにふるものつきぬん
あるじ　星のようなる
○むかし男　女　賢　異　心なりけり
ひとりとしてこそ　心なりけり
ひとりとしてこそ　あるべきなれ
世の中とて　しらずして　往　出ているんとて
ものいひて　ものいはん
出ているに　心なりけり　やさしいやさん
よのあるひとを　ものいはん
ごとくにして　出ているに　ひとりとして　ものいはん

心ちしてせき半もおぼえねとゆよりてるからんと
いているうのよてゆくこよりとんやうんとかどよ
出てゆくんうみんそんどゆくことろうもおぼし
ざりるもどゆくいりて
ろうこいるきせるりるこ年月ゆ
あどこ年ろて和やこまい
こりいてるゆのこと
人こいさおりいやこんむうゆる
おもうこよゆこいこどこえつい
けないていこしありてゆくんどもゆてるやあうゆん。

いいおこせこる
ここここここる年ゆあ花こどる
人のころこゆこせどもどる
う殖し
こるこまこここきくものるくど
おりいこここここえこるまし
又こあどしこるこゆよいいこここてゆここ
こゆこんこおりこころるこどいよ
あこしこんゆこあどるまき
う角し

後撰集巻五
笛竹のうきの弓
絃はかくるとも
おのがうきにたる
ゆるしなしの
歌

中ぞらにたちわる雲の行方を
自のうきすを成よるべ
とゝいひてまゝ少しのぶせて成よるしでゝ
ひとりゐるて歌よる中ぶやえ
うたがひ人をゝえもえれ行
うれしきなほ
やいあるまゝだちまばしひ男
なひ見て
水をゝれたゝ
とゝいひてその夜往
ぞもるゝいて
燈の夜乃の行とひやよるゝ
やの夜ゝ行ゝわあ
ゝ

秋の夜乃ちすと一夜よるせうやゝ
ゝゝゝ
いゝ
阿悔
○芳なるゝゝゝ
あゝゝ
ゝゝゝ
ゝゝゝ

女ども　ひとつとしのいとおやのあるもあるもきうで
なんあるさてけるるの男のりとよりかくるん
ほうはのかづくようにほうがた　身
とぎとろくあいもんぢろる　妹
女ども

振分　肩
くるべくしかくもかくもとぎぬ
あるべくしてたまろあづべ　上
なべいひてほのようほいのごくあいよろさて　年比
ゆるゆるなよ女ゆるくたりるくあるほうよりろもよ
よういるくてのうんやしてかうちのあたろやとれある　河内

よいきあるこのいのできよろるけるけるこのけりとれ女あ　恋
おりこうけいきろるていてやるれで男ることろ
あるてうるるやのうんとそひろうひてぜんざいの中
にうくれなてかうちいゆるかうそそれでけ女いよう
けさくしてうちるう　見て
ほうふるぎかきいちるくこ　田やま
ようろうやえるひろろゆくあ
やようころるときてかぎりるくうれくとおりのて。
うちうくいうで成よろ。ほきくうのたろやろよき
てうれでけうろそ心よくをほうろうんでろうう

○むかし男ありけり。男、かづらにしてけり。男、かづらにしてけり。
初めてかづらにしてけるにやあらむ。
昔、男ありけり。
あるじの年ごろもとあらばとぶらひて
年ごろとしいとなく訪ひたまふべき男きたりけり。
戸あけたまへとたたきけれど、あけで、
女、
とよみけるを、男、
梓弓引きてはなちし

我せこがごとうるはしきをみて
去
やどりていねんとしたれば女
あづさゆみひきてをりてやどりをる
心をしるよりもあひ
といひたれば男こたへをる。女いとうるはしくて。後
よるはきてをいでゝ。えをひつゝ。清水のあるところ
續
へよりて。そこなるいとをもて。指
血
をしのびてをりをる
清水
ちひさきをとこ離
をんなとをりをる
をとこ分をりをる
やうきて。指をいとゞつゝをるをりを
○昔をとこありけり。ひとをいとけなくをる女をしひて
をりをるをりをいとやをる
秋の野にあさるをとこ相の秋をる毎
あくがれをりをる清
をこのゝなる女をこ
をるをりをきこゆるをとこ
足緩来
うまをるであまの川ををる
得
○昔男。女ををりをる女ををりをる
をびをりをる人のをりをる

万葉四古人乃令飲有吉備能酒病者為便無賀賀賞鳥牟
主殿寮式三年一請貫簀一枚

おもひそめてはなれてのちはさらぬ
りてはなれてのちはなれてのちは

○むかし男女ありけり一夜いきて又いとゞ成まけ
まこと女のもとあるよりきたりとてやまと
あるいのうへにみえるとこゝに
我ぞとりてのちはなれてのちは
とかりくらべてのちはなれてのちは
やまとことばのうへにあらぬ男あらぬきて
小はるのいやるあんなとけまえ
小めのとりてのちはなれてのちは

貫簀

○むかし男この女のもとにまかりて女出ていとよしと
なりてあるこゝろ成よりあん
なりにけりとしをへてあと
○むかし東のあの女帝のひとゝ花のかゝるようあづけ
らまとりてるよ
花はあるかぎりきいけをせうぞ
しるべのこゝろひまるまるる
○芳とこゝろのうるる女のもとに
あるこゝろのことゝおりおもえて
つきこゝろのまゝくあるん

○むかしあるところにてあるごろもにはぬひ○のまくとて
ろろろろ仇のあるところ男いんぎやう茅葉よ
なんさがらんといふ男
誓又祈
ほうもきくにんそうぐえんしま
かのごうくまどおもてしるる
やらるとゆるさじ女もあるところ
○むかしのいろる女ゆゑにあらて
倭文麻環
いすくのをだまきのごときろうへ
むかしとろるとそしてとうか
とうろうんどのおりてやありうん

○むかし男ゆゑのまうぐ兎原の郡よかすいろる女ひとをび
不味
いきてちゑへいとおりしろうきまんで男
芦毛ようみちろ恨のいやはる
きくよ心とおりいまそ八
返
隠
こもりくのよろ四とうでうろ
あるとことのちて初ぎき
かるろ人のことそそやあり
○むかし男ゆきるろろ人のりる
いへとえるいろ○でじ○のちぶて

万葉四王緒乎淡緒ニ搓而綾
有者在手後ニ毛不相在貝ハ
方モ

心ひとつよるぶくろかな
面無
おもかるていくるるべし
○むかし。男ありけり。たえまどうの人のもとに
合緒
男のきあるとよりて山とぐまで
たえその後もあるんとぞそる
○昔。男ありけり。ひとりごとにいふ女のもと
狭
ゆきてとまりぬるまでとくるまぐ
延
ふるえんとんは我かりもちるよ
○むかし男。いろのみちるる女よあるとぞ。ひとり
ものとやかりいんん

ふるまでとひもとくる初ぐほの
ゆうぐほとぬ花よりあるる
うぬし
ぬるるとてむとそびーゆもと結て
あいるまでとそぞる
○昔。花の有常ぐいきるる。ありきてをそくきる
許
ぬるよ。清てやるる
ものよりいすいぬ世の中は
人をとるものるる
くし

西院帝淳和天皇諱大伴桓武第三皇子西院四條北西大宮東又謂淳和院

源至 嵯峨天皇孫 … 挙 順

ならはねば世の人ごとに何をかも
恋とはいふととひし我しも

○むかし。西院の帝と申すみかどおはしけり。そのみかどのみこ。たかいこ(崇)と申すいまそかりけり。そのみこうせ給ひて。御はぶり(葬)の夜。その宮の隣なりける男。御はぶり見んとて。女車にあひのりて出でたりけり。いとひさしうゐて出でたてまつらず。うちなきてやみぬべかりける間に。天の下の色このみ。源のいたる(至)といふ人。これも物見るに。この車を女車と見て。よりきてとかくなまめく間に。かのいたる蛍をとりて女の車に入れたりけるを。車なりける人。この蛍のともす(燈)火にや見ゆらん。ともしけち(滅)なんずるとて。のれる男のよめる

出でていなばかぎりなるべしともしけち年へぬるかとなく声をきけ

かのいたるかへし

いとあはれなくぞきこゆるともしけち消ゆるものともわれはしらずな

あめの下の色好みの歌にては。猶ぞありける。いたるはしたがふがおほぢ(祖父)なり。みこの本意なし。

○昔わかき男。けしう(殊)はあらぬ女を思ひけり。さかしら(情進)

神代紀吹棄氣噴之狹霧
古事記須勢理毘賣歌曾迩
奴岐宇奈
奴岐宇奈

らとろおやあるとて。おりいとぞけ〳〵とて。けせとおう（逐）へ
おいやんとそだちてそ〳〵まごおいやごと。人のるるしだ
ほご心いきおいるりけをでごうむいきおいる。
女をいやしをしでそまとちるる。ちるあごよ。そい（任）
ちいや（弥）ちりよほるる。係よおやけ女をおいう。男らの（逐）（棄）
ほくるるごせごも少ごむるよ形。なて出ていや。男（将）
なくくよん函

いでいるごもふ別きのるかく茅
あるるくよほるるるるるも

少し法てもえ入るる。おやあるてるる。行おりいて（絶）（周章）

こそいいしごいとるくる。芝ほるごかるるよ。おんごちに（真）（實）
もえ入るれで。ほごいてごそん。もてるるけ。の入相（惑）（願）（立）
ごりよたえ入て。又の日はいなのときごりにおん。
からるごていきおりるる。むしの子のるるうごらるる（辛）（息）（若）（人）
家るおおりいをるん。るるれるきるほるこおるん（好）（死）
○むし女るるるるもるるる。いるるやしき男の（姉妹）
ほるきいるりるあるる男りるる家る。やしき紀（貴）
るるりるおるるのほごりよう。のきるるあいて。（袍）
まごるるる家る。るごるいやる家れどちあ
いやしきるるちるるるごりる家ふまう。のきぬるる（肩）

張散
ちりやすてぐり。せんてもちて。ゆくるきよ法ろう。
色とのあてるる男きて。ぐ心ぐろう。ふし。
清
いときするる。ろうさう緑杉ぬ。のきとこんでやるて
ぬしろきの名こきこと先もちる
分
ゆるる年ぬ。ぐ名ふしぐりる
むしろ世のこと法るべ
○昔男。ちこのちとちるく女とあいてとろう。ふしよく
ちとあるぐりけて。ちとくいきこんど数行いくう法
ちて。ちりていこでちとえきまぐろうろ。ほとる
えあるぐりるるる行りれた。二日三ちぐりけちる

桓武第七皇子貞観十三年十月八日薨

ありてえいうでかちん
いるぐちしるぐよいまぐちちど法
ゆぐ面ちと法ちるる
ものちぐちしるよ法ちるる面
○むしろ。賀陽親王やの名ちしみこちるちる法ちる。それちこ
女とふぐしる法て。いちちしる法ぐちる法ちるいちる。
愛日本紀
人ゆはめきてあちるる。我のちしるいちる。又人
きて法ちて又やち。部ちのちるひきて
繪
汝
ゆちるぐよ法ちるぐ法ちしるあまちこのきて
行ちこ法ま部ちよあちる

やとり給へ。かくなんなりにきとて
名にしおはゞいなでのたゝりをけさぞ
いなでとはいはじとうとはるゝなれば
とてさつきまるんをさゝぐ。
いほりおりたゝせその田をもとれるの
とゞ住まよ稲りをえぬぞ
○むかしあるこの人よるのゝ鉄縣心をせんとて。よじて
うとき人よりあるぶらうして。家ゝ刀自重さて
女のさうぞくうばうんとて。あるじて男ゝ衣の
こしよりいはなさと

出てやり給へ。男ゝの歌よりぬきけまで
としをへてすみなれにしすみかをば
いかゞあるべきかはりはてぬらん
ゆきあらひ中よりうれたゝ。ゆきてよ。
ゆきあらひ中よりうれたゝ。真
ゝよあらしていて
○むかし男あり。人のしたへ。いでけ男よ
あいそんとゝいふ。うち出ん中ゝくやあるらん。
しのやうなるうてきるべき時よりかゝりおりい
ゝとゝいふ。おやきはをてゝ。ゝ家ゝ
で。ゝはゝいきとゝとゝれで。ゝゝとゝ
とりゝゝ。ゝゝみる月のいゝゝ。ゝあるきゝ。

よいとあるべとうあ。行ふうて（漸）やうとでしたこの形
ゆるよろ。巻ろうとうべめづらぶ男又ふをりて
行ふるう雲のうへ（海）でいなぐ（往）ふて
あきうぜうてやかりうぐこせ（雁）
えんぐしき夜の日ろうるぐひれど
そのうてうるくあぐうるすき
○首ととぐいやうろうて変あうろう。ゆうろうぐ
ゆいいろうと。人の思いきうといと変ととい（他）
てとうれまろう月日ていおうをうろ又よあさまし
きいえんせで用うのへまろ事。えうやし狂いよ（對面）

言んぐいゆるくたりいうどいてうん行う世の中ゆ人の心ハ。
めうれでうとうれぬべきあうてありれをいうりうれで。（目離）
待て風う
先うろうもおりほうえうまうろう
うきしうるうれでおもうぐまうゆ
○むう男。行もぐろういでやうろ女あうろう。うれでゆ
男ゆあぐうりやきてゆまるさめうぐ待うつゆう
大めぐのひうくもあまうにうりぬれで（幣）
おりへどえうてたのまぐりうれ
をーとうて

大ぬさとあるよりてしるべしてを
つりよりてせをありてよあと
○若男あり女ぞるのこゝろしらせんとて人とまらう
こゝろ
ゆきもとゝきものこゝろ人ゆゑ
さゝとゝどうれどゝゝどうの家

和本充実
92